第14号（2019年夏号）
発行日　2019年8月30日
信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター　ニューズレター

巻頭言　「この自分」の枠をゆるめる「自我関与」
―シュタイナーの視点から日本の道徳教育を考える―

2016年、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」は、「考え、議論する道徳」への質的転化を目指す質の高い多様な指導方法として、「問題解決的な学習」、「道徳的行為に関する体験的な学習」と並び、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」を示しました。ここでは、個々人の自我（自分）が、ある物語や資料を読んだ上で、「この自分だったらこうするのに」と考え、その内容について他者と議論するなかで、「この自分はこう考えるけれど、あの人は違う風に考えている。では、どうすればお互いの納得解を見つけられるだろうか」と吟味することで、自身の考えを拡げていくことを目指していると考えられます。

確かに、多様な価値観を尊重しながら生活していくために、こうしたレッスンが重要であることは間違いないでしょう。しかしここでは、「この自分」の枠自体が揺らぎ、変容するような「自我関与」の可能性は除外されているように思われます。

「シュタイナー教育（ヴァルドルフ教育）」の創設者として知られるルドルフ・シュタイナーは、終生、人々の間にどのようにエゴイズムの克服を実現していくかを課題としていましたが、まさにこの文脈で、「この自分」の枠が揺らぐような、「一体となって知ること」というホリスティックな知のあり方を重視していました。

例えば、古代ギリシアにおいて、人々が神話の登場人物と一体となることを通じて倫理的な生を営んでいたこと。古代北欧において、夏至の日の自然の生命力の高まりや、冬至の日の死にまつわる物悲しさを、自然と一体となって感じていたこと――このように、「この自分」の枠をいったんゆるめて、普段の自分とは別の感情を得るということが、「この自分」に囚われたエゴイスティックな感情からの解放につながるとシュタイナーは見ていました。そして、こうした作用を20世紀当時の世の中に再びもたらすものとして、自身の思想や著作を構想していたのです。

こうしたシュタイナーの論を踏まえるとき、現代の日本の道徳教育においても、子ども達の「この自分」同士が「考え、議論する」だけではない道徳教育のあり方――子ども達が物語の登場人物と一体となって味わうだけ、自然と一体となって季節の流れを味わうだけ――を、選択肢のなかに含めてもいいように感じられます。そうしたタイプの「自我関与」についても、可能性を探ってみてもいいのではないでしょうか。

河野桃子（教職支援センター　講師）

※この内容は、筆者が2019年6月23日に日本ホリスティック教育/ケア学会第3回研究大会で行った個人研究発表「ホリスティックな知がもたらす道徳的発達の可能性―R.シュタイナーによる「一体となって知ること（Sich-Einswissen）」を手がかりに」の内容に基づいて再構成したものです。

教職支援センター

シリーズ　活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して１０年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.9　人文学部編② ～

上田市立第五中学校

木藤岡　美緒　先生

人文学部　人文学科　平成28年度卒業

長野県の教員として働いてみて

長野県の教員として採用となり、2年目になりました。2年目の今年度は初めて中学1年生の担任も務めています。これまで教員の仕事をしてきて私が感じているのは、大変だなあ。上手くいかないことばかりで苦しいなあ。ということです。後ろ向きな感想ですが、これが2年間教員をやってきて私が感じている正直な気持ちです。授業も生徒との関係も、大学在学中は漠然とではありますが、もう少し上手くやっているイメージでいました。ですが、現実は甘くなく、上手くいかないことの連続で悩み、苦しくもがくことの方が多いです。ですが、幸いなことに周りには授業や生徒とのかかわりで効果的な助言をくださる先生、苦しさを共有してくださる先生が何人もおり、なんとか教員としてやることができています。今年度は初担任と同時に教育課程の授業者にもなりました。自分のクラスで授業を行う予定です。7月には教育課程の事前授業で南アメリカ州の環境と開発についての授業をしました。9月の本番の授業はアジア州で東南アジアを扱います。まだ授業構想の段階で、準備が大変ですが、楽しみです。

教員の仕事は大変だとか、辛いなんて冒頭で言いましたが、その気持ちは卒業式ですべて帳消しになってしまっています。これまで2回の卒業式を経験していますが、一回りも二回りも成長した生徒を目の当たりにすると今までの苦労はなかったかのように思えます。もしかしたらこのような気持ちを味わいたいから教員を続けているのかもしれません。今年度担任をしている生徒の卒業式に居合わせられるか分かりませんが、彼らの近くで日々笑い、悲しみ、怒り…などの感情を共有したり、授業を初め、給食、清掃、休み時間、宿泊学習など多くの時間を過ごしている分、彼らが卒業式を迎えた時、自分の中でどのような感情がわき上がるのか、教員の仕事のとらえがどう変化するのか、自分でとても楽しみにしています。そのためにも、彼らが中学校の3年間で大きく成長できるためにも、どのような手立てをしたらより良い成長、学びにつながるのか、日々実践と分析を通じて生徒と接していきたいと考えています。

愛知県立岡崎北高等学校

村田　拓海　先生

人文学部 人文学科　平成28年度卒業

現在私は愛知県立岡崎北高等学校で、高校２年生の担任をしています。教員という仕事で大切にしているのは、生徒や保護者の方、周りの先生方との信頼関係を構築することです。教員でなくても、信頼できない人の話しは聞きたくありませんよね。教員が相手にするのは「人」ですから、この信頼関係こそ、教職という仕事の根幹であると思っています。

信頼関係を構築するために必要なことは何でしょうか？一つには、教科指導力だと思います。生徒からの信頼を勝ち取るためには、何よりもまず、いい授業をしなければなりません。そのために、私は大学時代に専門知識を身につけること、教員になってからは授業力を磨いています。英語の授業においては、いかに生徒が英語を使って考える場面を作るかという点に留意して、４技能をバランス良く配置する授業展開を工夫しています。

二つ目に必要なのは、コミュニケーション能力だと思います。コミュニケーションを通して相手のことを知り、そして自分についても相手に知ってもらう。そのことを通じて、お互いの信頼関係を作り上げていかなければなりません。積極的にこちらからアプローチすることで、心を開いてくれる生徒もいます。普段から、積極的に話しかけることを意識しています。

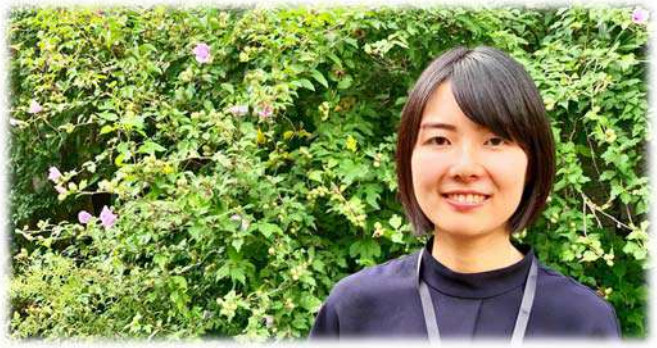
教科指導力、コミュニケーション能力以上に、信頼関係を構築する上で最も必要なことは、「人間力」であると私は考えています。これは、いまの私の課題でもあります。「人間力」という言葉の定義は非常に曖昧ではありますが、要するに、「この人に教えてもらいたい！」「この人と一緒に仕事をしたい！」と相手に思ってもらえる力だと私は考えています。私はあらゆることに興味を持って取り組むことで、この「人間力」を磨いています。

現在、私は「コスモサイエンスコース」というコースの担任をしています。普通科理系の学習内容にプラスして、理系の内容に特化した授業や課題研究を行ったり、大学や研究施設を見学・体験したりするコースです。文系出身の私が、このコースの担任になると分かったときは、正直不安しかありませんでした。しかしながら、文系出身の私だからこそ、生徒たちと同じ目線で学ぶことができるのだと感じるようになりました。最近では、留学生との交流をセッティングしたり、海外からの研究者に英語で講義をしていただいたりと、英語科の教員だからこそできる取り組みに、挑戦しています。理系のことは分からないから、と逃げるのではなく、興味を持って取り組みながら、文系出身の私だからこそできる工夫をして、コスモサイエンスコースがより良いコースになるように努力しています。

教職の仕事は、「自分を磨く」仕事だと思います。私自身まだまだ未熟ですが、教科指導力、コミュニケーション能力、人間力に日々磨きをかけています。みなさんも教職を通して自分自身を磨きませんか？

教職支援センター４～７月の動き

〇新入生教職ガイダンス(4/5)、〇高年次生教職ガイダンス（各学部ごと4/1～5)、〇保健学科への授業協力協議(4/19、6/14)、〇CST講座開講(4/24)〇各教育委員会･校長会への協力依頼訪問(松本市:4/24･5/17、上田市:6/6、南箕輪村:5/28、伊那市:5/28)、〇長野県教育委員会教員採用試験説明来学(5/7)、〇長野工業高等学校と工業教員養成に関わる打合せ(5/13)、〇松本市教育委員会との連携交流会(5/17)、〇長野県総合教育センターとの連携連絡会(6/11)、〇長野県教育委員会との連携協議会(6/14)、〇CST養成プログラム実施委員会（6/18）、〇信州大学教職大学院学生ガイダンス(6/12(農)、6/17(工)、6/18(繊維)、7/10(人文･理))、〇教職支援センター運営委員会(6/20)、〇教員免許更新支援センター会議(6/20)、〇教員免許更新支援センター運営委員会(7/2)



これまでの私の研究テーマは、障害や支援ニーズのある子どもに関することです。障害のある子どもへの早期からの支援の重要性は多くの研究で指摘されており、対象児への直接的支援はもちろん、保護者や担任保育者、教師へのサポートも求められています。障害児に関する発達相談や教育相談は多領域の様々な専門機関・専門職によって行われています。そうした現状を踏まえ、これまでの研究では、発達障害児とその保護者、指導者などへの発達障害にかかわる問題の相談活動を「発達障害カウンセリング」とし、それに携わるどの立場の相談実践者（相談をうける側。例えば、特別支援教育コーディネーターや教育相談担当の教員や心理職など）にも共通して求められる知識やスキル、態度があるのではないかという観点から研究を行ってきました。

研究を通して、相談活動におけるアプローチには、①心理学をベースにしたカウンセリング手法のように主訴や保護者の想いに対する受容・共感、傾聴といった「感情面へのアプローチ」、②子ども・障害理解を促すため、対象児や教育支援などへの認知の仕方・考え方を適切なものに導く「認知面へのアプローチ」、③対象児の不適応行動等に対する大人の指導・対応を分析し、具体的な対応・支援方法を伝える「行動へのアプローチ」の3つがあることが示唆されました。特に、障害児に関する相談では、保護者や指導者が感じている困り感や対応の難しさへこたえていく認知面や行動へのアプローチがより多く行われていることが明らかになりました。一方で、アドバイスをたくさん行うことがプレッシャーや負荷になってしまうことが想定されるクライエントには、認知面や行動へのアプローチは最低限にし、まずは感情面のアプローチを優先させる等、クライエントに応じて3つのアプローチの比率を調整していくといった高度なスキルが求められていました。

今後は、現場に出る前の養成段階で、上記のスキルや必要となる知識、態度について、どのように学び、身につけていくとよいのか検討したいと考えています。　　（教職支援センター助教　枡　千晶）

教職科目を教員免許状以外の資格取得に開放します。

以下の資格取得に向けて、各学部からの依頼を受け、専門学部の教職科目を開放することになりました。

○人文学部：公認心理士科目「発達心理学」（教職科目名「発達と教育」（担当：枡））
「障害者・障害児心理学」（教職科目名「障害と共生社会」（担当：庄司））

○医学部保健学科：理学療法士・作業療法士科目
「教職論」（担当：河野）、「教育学概論」（担当：荒井）、
「発達と教育」（担当：枡）、「生徒指導の理論と実践」（担当：田村）、
「教育相談の理論と実践」（担当：枡）

編集後記

前期が終わり、教職支援センターでは免許状更新講習と夏季集中講義の季節に入っています。夏休みといっても、教職員には相変わらず余裕の少ない毎日ですが、少しでも時間を見つけてリフレッシュしたいですね。後期からも授業や教職相談のことでいろいろお世話になりますが、引き続きよろしくお願いいたします。（広報担当　河野桃子）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教職支援センター

■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1　■TEL：0263-37-3367　■MAIL：kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/kyoushokutop.html